

マスターズを彩るレジェンドたち(15)

青森から朗報、M90カルテット リレーで快挙&レジェンド続

暦のうえでは深秋の10月。神無月は8日が寒露で露が霜に変わる季節とされ、23日の霜降は秋も終わりに近付き霜が降りるとされる。いよいよ秋冷から晩秋へ。しかし、いまだコロナ禍における朗報は聞かれず、スポーツどころではない。マスターズ陸上もご多分に漏れず、である。今月は旧国名の陸奥(現・青森)の90代カルテットが明るいニュースを届けてくれた。そのお知らせほか。

写真/田中博男さん

黄金の脚誇った 長崎マ会長・貝原幸三さん(75歳)

貝原幸三さん(75歳)。10月号で紹介したレジェンドの1人、倉津緑さんが所属している長崎マスターズ陸上の会長だ。倉津さんによると「現在は競技会の運営などに力を注がれていますが、以前、競技会で活躍されていた頃は、私たち会員の仲間からは『あの人が貝原さんよ』と、ささやきあった」と言われるほど、素晴らしい活躍ぶりだった。

日本マスターズが創立した頃は、出場できる年齢が男子40歳、女子35歳からとしていた。1983年に男子は、30歳から出場できるSM(セミマスターズ)が設定され(当初は記録未公認)、その頃から貝原さんは長崎マスターズの競技会へ姿を見せていた。

貝原さんは地元の長崎・諫早市で行われた1983年の第4回全日本マスターズ陸上で採用されたSM35クラスの100mに37歳で出場。11秒3(-0.5)で1位だった。次いで第5回大会は、アジアマスターズ陸上と兼ねて沖縄で開催されたが、こどもSM100m10秒9(+2.2)で1位に。2位が11秒5だったから、貝原さんがいかに速かったかが分かる。第6回大会は、徳島・鳴門市で行われた。39歳になっていた貝原さんだったが、11秒2(-0.8)の大会新で3連覇。第7回は東京の、旧国立競技場が会場。貝原さんは日本マスターズが記録を公認する40歳になっていた。

1986(昭和61)年の東京大会では、

M40クラスの100mと200mを駆けた貝原さんの脚はさえ、100m11秒06(+0.5)、200m23秒06(-0.7)と両種目で日本新を出し、男子優秀選手に選ばれた。この年は200mでさらにタイムを縮める22秒7をマークしている。

翌年の1987年には豪州メルボルンであった第7回世界ベテランズ(現・マスターズ)陸上へ出場。M40・100m11秒12、200m22秒74で4、2位だった。その後、フィンランド・ツルクでの第9回大会はM45・100mで11秒45のトップ。宮崎であった第10回大会ではM45・100m11秒54で優勝、200mは23秒63の日本新ではあったが2位だった。日本チームの4×100mRではアンカーを任せられ、45秒69でこちらも惜しくも2位となった。

このように50代までの貝原さんは世界マスターズ陸上をはじめ、アジア、日本各マスターズ陸上で優勝者や上位者として名前が出ていた。日本マスターズ陸上の日本記録一覧にもM35～50までは100m、200mで貝原さんの名は必ず見られた。

60代になっても2006年の宮城であった第27回全日本マスターズ陸上に出場し、M60・100mは13秒08(+0.7)で2位となったが、200mは26秒96(±0.0)で優勝した。65歳になった2011年に和歌山での第32回全日本マスターズ陸上にもエントリーし、トップこそ奪えなかったが、M65・60m、100m、200mの3種目に出場した。

この年の日本マスターズ10傑には、M65・100mに13秒58、200mでも28

秒56で入っている。また、2012年に台湾の台北で行われた第17回アジアマスターズ陸上に66歳で出場し、M65・100m、200mをベスト3内に収めている。貝原さんは「60歳代(の後半)を迎えると、競技より舞台裏の大会運営などに携わった方がいい」と現在に至る。

長崎県の雲仙市で育ち、長崎市内の高校から中京大へ進んだ貝原さんは、1969(昭和44)年の第38回日本インカレで中京大が4×100mRで3位になったときの2走で頑張った。翌年、第39回大会での貝原さんは100m、200m、4×100mRに出て、いずれも3位に。第40回大会では100mで2位、貝原さんが2走を務めた4×100mRは学生一になった。

陸上一筋で過ごしてきた貝原さんは「特にうれしかったとか、悔しかったとかのレースはないけど、世界マスターズとか、海外で走った大会は印象に残っていますかね」と話す。元長崎マスターズの理事長で、現在は熊本マスターズ会長の川上明生さん(84歳/2021年6月号参照)は貝原さんについて「一言で言い表せば『好人物』がぴったりです」と話す。

“津軽長寿”のカルテットが快挙 M90・両リレーで意欲の世界新

やったぞ、津軽長寿のカルテット・スプリンター!

2021年8月29日、青森県弘前市運動公園競技場であった第35回青森マスターズ陸上競技選手権でM90(90～94歳)のリレーチームが、4×100m

と4×400m両リレーで世界記録を大幅に破る新記録を成し遂げた。4×100mRが1分43秒69、4×400mRは9分56秒36だった。

従来の世界記録は4×100mRが2分22秒37、4×400mRは12分41秒69で2014年にいずれも米国チームがつくっていた。

青森のM90チームのオーダーは5月23日の第5回青森マスターズ陸上の記録会で4×400mRに8分49秒01の世界新を出したときと同じ。ただし、このときのタイムは出場チームが青森チームのみだったので未公認となった。ルールによると2チーム以上が必要となっている。

今レースは、気温が30度近かった。1走は敦賀又四郎さん(92歳)＝五所川原市、2走が工藤勇蔵さん(92歳)＝同、3走は三ツ谷光造さん(90歳)＝鯉ヶ沢町、アンカーが田中博男さん(90歳)＝青森市が午前中最後のレースとして、午後1時に4×100mRのスタートを切った。チーム数は年齢混合のチームと3チームで行われた。

結果は先述どおりの1分43秒69で、2分台の世界記録を大きく上回る記録が出た。青森陸協、マスターズ関係者の人たちから祝福の大歓声があがった。

“勇気百倍”のレジェンドの4選手は十分に休息した後、午後最後のレースとして3時30分に4×400mRのスタートを切った。こちらは年齢混同チー

ムと2チームで行われた。1走の敦賀さんから工藤さん、三ツ谷さんとバトンが渡り、最終走者の田中さんがゴール。タイムは先の9分56秒36。大幅な世界記録の更新となった。

「世界新が出せたのは4人の総合力」と喜ぶカルテット。しかし、レース前に気掛かりなことがあった。それは3走の三ツ谷さんが体調を崩して入院し、8月19日に退院したばかりだったということ。残りの3人が心配して「休んでもいい」と勧めたが、三ツ谷さんは責任感の強い人で「絶対に走りたい」と言い切った。

そこで田中さんはレース数日前に合同練習を企画。田中さんはリーダーとして各人の100mと400mのタイムをさまざまな角度から分析し「万一、バトンを落としても、マイル(4×400m)リレーでも2分程、世界記録よりもいいタイムで」と、絶対の自信を持った。

三ツ谷さんには「全力で走ってはダメ。歩くか、小走りで」と注文をつけて当日を迎えた。レース前に緊張感は全くなかった。「余裕を持っていこう」を合言葉に、4人とも自分なりのパワーを出し切った。

レース後は大変だった。田中さんの自宅には陸上を知る人はもちろん、知らない人からも電話がかかりっぱなし。「これほど大勢の人が喜んでくれるとは」と話す。カルテットの今後の目標は「来年はディフェンディング・

チャンピオンとは思わず、挑戦者の気持ちでさらなる記録を」と誓い合っている。さらに田中さんは、2021年5月に100m16秒86、200m36秒02の両種目にM90クラスの世界新を樹立したが、リレーチームと同じ「2022年にはこれ以上の記録を出さなくては」と張り切っている。来年度に期待大だ。

W70・三段跳の大日向暁子さん(71歳)最後の望みは埼玉?!

2021年5月1日に岐阜マスターズ陸上競技選手権に出場した長野の大日向暁子さん(71歳)は、W70・三段跳に8m98の世界新をマークし、女王の貫禄を示した。この後、8月に北の大地の北海道に飛び、再度「記録を目指して」挑んだ。

だが、脚(ヒザ)の故障で2週間走り込みをしていなかったことが響き、全く跳べなかった。「やはり試合というか、実戦での感覚がダメで、身体も全然動かなかった」と不発に終わった。失敗の分を取り返そうと、8月28日の三重マスターズ陸上に申し込んだが、残念ながらコロナ禍で中止となった。

それならと9月18日の地元の長野マスターズ陸上までと思っていた矢先、こちらも中止に。常に“攻め”の姿勢を持ち続ける大日向さんは、10月16日の埼玉マスターズ陸上秋季記録会に狙いをつけている。ぜひとも埼玉(上尾)では跳んでほしいものだ。



青森M90・カルテットが4×100mR(左)と4×400mR(右)で世界記録を樹立したときの写真。左から1走＝敦賀又四郎さん(92歳)、2走＝工藤勇蔵さん(92歳)、3走＝三ツ谷光造さん(90歳)、4走＝田中博男さん(90歳)両種目、メンバー走順共に同じ。